植民地都市イメージと文化現象 ―1920年代の京城―

全 遇 容

1． はじめに

都市はその発生当初から多様な象徴物の集積体であった[1]。宗教権力であれ世俗権力であれ、または資本主義的フェティシズム権力であれ、空間を掌握して支配した権力は、その空間の上に自分の権威と意思を表現してきた。道路の幅と方向、建築物の規模と高さ、身分や職業による住居空間の制限など、都市の空間構造を規定するさまざまな要素は、それ自体の機能を持つのみならず、権力の意図する象徴性を併せて体現するものである。そのような点で都市空間は常に政治的でイデオロギー的である[2]。もちろん権力の意図が空間上にそのまま具現されるということではない。何より都市は権力よりも生命が長い。ひとつの都市の上には、各時代の権力が作用したさまざまなレベルの物理的構造とその痕跡が集積されるものである。新しい権力は総じて都市空間における既存権力の痕跡を消そうとするが、空間構造を完全にひっくり返してしまうことは容易ではない。また、都市の住民たちが権力の意図通りに都市空間を認知するというわけでもない。彼らは過去の痕跡に対する記憶を持った存在であり、それに立脚して慣性的形態を維持する存在である。それによって、権力が都市に盛り込もうとしたテクストは、読者（住民）によって全く異なる方法で読解される可能性もある。そのような点で、都市空間は権力の意思をそのまま表現する展示場というよりも、「権力が痕跡を残した社会葛藤と政治過程の物理的考証物」なのである[3]。

都市空間自体が政治的・イデオロギー的葛藤の所産である限り、どの時点においても、全体または都市内特定地区や特定建造物に対して、都市住民は政治的・イデオロギー的反応をみせる可能性がある。それは一般的に「イメージ Image」として表現されるが、そのイメージは、街路網や建造物によって都市住民一般の動線と視線が規制されることによって、または都市住民の多数が特定の場所に関連して歴史的経験を共有することによって、「公共のイメージ Public Image」になる[4]。同じ脈絡でジンメルは、都市においては視感覚がすべてのものを支配するとした[5]。もちろん都市に対するイメージは、都市を支配している権力の「意図」と決して無関係ではない。よって都市住民は日常生活の中で常に権力の意図と対面することになり、それに対して肯定であれ否定

---

[1] Lewis Mumford は、発生期の都市は、神聖で安定した権力を賛美する具体的表現手段であったと述べている。（Lewis Mumford、金榮記訳『歴史の中の都市(歴史 속의 都市)』明寶文化社、1990年、26頁）。

[2] Henri LeFebvre, “Reflections on the politics of space,” Antipode, vol8, 1976（アンリ・ルフェーブル、チェ・ビョンス/ハン・チヨン編訳「空間政治に対する反省」『資本主義都市化と都市計画』ハンウルに翻訳転載（앙리 르페브르, 최병수・한지연(편역) 「공간정치에 대한 반성」『자본주의 도시화와 도시계획』한울）1989年、234頁）。

[3] Mike Savage・Allen Wadd、キム・ワンベ/パク・セフン訳『資本主義都市と近代性』ハンウル（Mike Savage・Allen Wadd、김왕배・박세훈（역）『자본주의 도시와 근대성』한울）1996年、165頁。

[4] Lynch は公共のイメージとは①特定の物理的現実、②共通の文化、③生理学的特質の3つが相互作用をしながら形成されると述べた。（Kevin Lynch、金儀遠監訳『都市の像 The Image of the City(都市의 像 The Image of the City)』緑苑出版社、1988年、17頁）。

[5] Mike Savage 他、前掲書、148頁。

であれ、従順であれ抵抗であれ、それぞれの反応を示さざるをえない。そして大概の場合は、自分たちを取り巻く構造物のどっしりとした重みに圧倒されて、権力の意図を受容するようになる。

リンチは、都市イメージを形成する要素として①path（道、道路）、②edge（境界）、③district（区域）、④node（交差路、場所）、⑤landmark の相互転換可能な5つのカテゴリーを設定した[6]。人は誰でも、神聖な場所－不潔な場所／活気に満ちた通り－暗くじめじめした通り／雄壮な建物－みすぼらしい建物などを区別して認知しており、そのイメージは総じて都市住民の大多数に共有される。もちろん、都市内の特定の階層、または民族にだけ共有されるイメージ要素も少なくない。この場合、都市または都市内の特定の場所や建築物のイメージは、階級意識や民族意識に影響を及ぼし、逆にそのような意識が特定のイメージを強化することもある。一部の集団には、ときとして権力が意図する「公共のイメージ」とは相反するイメージが投影されたりもする。

韓国が日本の植民地になる前のソウルは、集権的中世国家の首都として豊富なイメージ要素（imagability）を持つ都市であった。街路網の配置、街路の幅、主要な建物の配置と規格などが儒教的統治理念と風水的空間観に立脚して設計・規定され、500年以上の間首都として存続する過程で多くの歴史的事件が発生したことで、それと関連した集団的記憶の場所も随所に散在していた。開港以後、特に1894年以後に都市ソウルに新しいイメージ要素が加わるようになった。外国公館、教会、新式学校など西欧的建築物が出現し、電車や汽車など新しい交通施設が登場すると同時に、円丘壇、独立門、奨忠団、記念碑殿などの政治的象徴性を強く持った建造物も新しく建立された。すでに1910年以前から、都市景観の急速な変化は進行していた。都市近代化が進展する中で、中世都市的なイメージは自然と退色するほかなかった。しかし、少なくともこの時期の変化は、既存の都市イメージを全面的に顛倒させるものではなかった。王宮を中心とした既存の都市区間の位階は、そのまま維持されていた。王宮は依然として尊厳ある空間であり、ソウルの中心は依然として鍾路＝雲従街であった。それが決定的に顛倒し始めたのは、日本が韓国を強占してからのことだった。

本稿は、植民地期京城の都市景観の変化とイメージの顛倒が朝鮮人住民の感受性と意識に与えた影響を検討してみようとするものである。植民地期京城の景観の変化は、同じ都市に居住する住民でありながら、文化的背景と場所的経験を全く異とする異民族支配者が、一方的に主導したものであった。よってその変化に対する朝鮮人の意識の中には、植民支配全般に対する態度だけでなく、同じ都市住民として生きていく在京城日本人に対する態度も反映されることになる。この点も、やはり本稿の検討対象である。

本稿が扱う主題と関連して、最近いくつかの論文が出されている。植民地下の新しい都市景観の形成に対しては李揆穆とキム・ハンベの研究が参考になる[7]。彼らは景観論に立脚して植民地下の都市景観の変化を検討し、それが「朝鮮の王権に対する伝統的イメージを制圧・顛覆し、植

---

[6] Kevin Lynch 前掲書、74頁。

[7] 李揆穆「ソウル近代都市景観を読む」『ソウル20世紀空間変遷史』ソウル市政開発研究院（이규목「서울 근대 도시경관 읽기」『서울 20세기 공간변천사』서울시정개발연구원）2001年。
キム・ハンベ「南村都市景観の過去、現在、未来」『ソウル南村—時間、場所、人』ソウル学研究所（김한배「남촌 도시경관의 과거, 현재, 미래」『서울 남촌—시간, 장소, 사람』서울학연구소）2003年。

民支配者の権威を威圧的に露にすることに」目的をおいた植民権力によってなされたものであると述べている。全遇容は、大韓帝国期の都市改造事業と日帝による強占初期の都市改造事業を、主に都市街路網の新設拡張方式と新しい建造物の築造方式を中心に整理し、両者はともに都市ソウルの「近代的改造」を追求したが、大韓帝国期のそれが都市発展の内在的な流れの中にあるものであったのに対し、日帝の強占期のそれは大韓帝国期の都市改造事業の成果を「侮辱」し、それと関連して形成された公共のイメージを極端に逆転させる結果を生んだと述べた[8]。

キム・ヨングンは、日帝の強占後、新しい街路網の形成、主要な近代的建造物の築造、近代的交通手段の拡充など、植民地状況において「近代的施設、建造物」が増えた過程を整理し、その過程で「植民地的近代」を迎えた都市住民の日常的感受性を分析し、それを「周辺人的否定意識」と規定している[9]。彼はこれを、「都市の日常生活において近代的な社会変化を経験しこれに適応して生きるが、それが植民地下で起こる変化であることで、それに対して距離感を持たざるをえない」[10]と定義した。都市的感受性の問題を扱った文学分野などでの最近の研究も、1930年代以後の都市生活の近(現)代性に注目することで、キム・ヨングンと類似の傾向をみせている[11]。ところで、これら一連の研究は「植民地的近代」の様相を都市的消費生活から導出しようとしたため、主に資本の空間支配の様相に焦点を合わせており、植民地権力の空間政治に対しては相対的に注意が向けられていない感がある。もちろん1930年代の都市化と産業化が資本主義的日常を普遍化し、その結果、都市大衆の感受性もやはりそれに適合して変化したということは明らかである。しかし他方で、これらの研究に1930年代に生産されたテクストの限界を認識しない傾向がある点も否定できない。日帝の強占期の大衆の感受性を表現するテクストは、過酷な検閲制度下において生産されたものであるため、都市の大衆の感じ方と考え方を正しく伝えてはくれない。例えば、1930年代の民族問題を正面から扱った小説はただの1編もみつけることができない一方で、せいぜい日本の大陸侵略政策に便乗して中国人に対する敵対感を鼓吹した文章だけが多く生産されただけである[12]。このような状況をきちんと考慮していないため、30年代の都市大衆の感受性を扱った既存研究は、総じて大衆の「脱政治的」、「脱民族的」性向のみを浮き彫りにしており、その結果、植民地下の民族問題を舞台の後ろに退かせてしまった。その代わりに新しく拡散して

---

[8] 全遇容「大韓帝国期～日帝初期ソウル空間の変化と権力の志向」『典農史論』（전우용「대한제국기～일제초기 서울 공간의 변화와 권력의 지향」『전농사론』）5、1999年。

[9] キム・ヨングン「日帝下日常生活の変化とその性格に関する研究―京城の都市空間を中心に」延世大学校社会学科博士学位論文(김영근「일제하 일상생활의 변화와 그 성격에 관한 연구― 경성의 도시공간을 중심으로」연세대학교 사회학과 박사학위논문）1999年。

[10] 同上、166-167頁。

[11] 崔惠實「京城の都市化が1930年代韓国モダニズム小説に与えた影響」『ソウル学研究』（최혜실「경성의 도시화가 1930년대 한국모더니즘 소설에 미친 영향」『서울학연구』）9、1998年。キム・ジンソン『ソウルにダンスホールを許可しろ―現代性の形成』現実文化研究(김진송『서울에 딴스홀을 許하라― 현대성의 형성』현실문화연구）1999年。カン・シモ他「日帝植民地治下京城流民の都市的感受性形成過程研究―1930年代韓国小説に表れた都市的消費文化の成立を中心に―」『ソウル学研究』(강심호 외「일제 식민지 치하 경성부민의 도시적 감수성 형성과정 연구― 1930년대 한국소설에 나타난 도시적 소비문화의 성립을 중심으로― 」『서울학연구』）21、2003年などを参照。

[12] 日帝の強占期の中国人に対する敵対感を鼓吹するテクストに関しては、全遇容「韓国近代の華僑問題」『韓国史学報』高麗史学会（전우용 「한국 근대의 華僑問題」『한국사학보』고려사학회）、2003年を参照。

いる資本主義的物質世界に適応する問題だけが全面化されており、それにともなって親日の社会的動機を観念の中で拡大する結果がもたらされた。

筆者もやはり、1930年代以後の資料が持つ根本的限界を突破する能力は持っていない。ただし、この時期に関する研究は「公刊」されたテクスト以外に口述史資料を幅広く活用してようやく現実性を持つことになるだろうという展望を指摘しておきたい。よって本稿では、いったん、朝鮮人が発言することのできる範囲が相対的に広かった1920年代の京城の都市変化像と、この時期の京城都市住民の京城および京城市内の構造物に対するイメージだけを検討することにする。1920年代が1930年代に比べて都市空間に対する植民権力の直接介入がかなり一般的だったという点で、これは単に時期限定のためのものではない。それは、植民権力と都市大衆の政治的、イデオロギー的対立点が、都市景観においてどのように具体的に表れるのかを検討する意味も持っている。

2．民族別居住地分離と南北村

日本の民間人がソウルに居住し始めたのは1882年からで、彼らの居留地が明示的に確定したのは1885年のことであった[13]。1885年に朝鮮政府が日本人居留地として南山の麓を指定したのは、この一帯を位階上低い空間として認識してきた慣行と無関係ではない[14]。いわゆる南村と呼ばれてきた南山の麓は、朝鮮後期には武官や南人・少論などの劣勢両班が主に居住していた地域であり[15]、特に日本人居留地として割り当てられた「公使館を基点として領事館から北に向かう小さな道の両側と、その西側の端から後に本町1丁目になる道の東側の端部分までの区間[16]」は、「ジンゴゲ」と呼ばれ、地質がよくないために勢力のある人々は居住を避けたところだった。当時、朝鮮政府は外国人のソウル居住をやむを得ず許容しながらも、彼らが宮闕と官衙が密集している北村（清渓川以北）まで浸透することは、極力阻止しようとした。その結果、西欧諸国の公館と中国、日本公館はすべて清渓川以南、または以西地帯に配置されたのである。

日本の商人たちにとっては、居住に不便なだけでなく十分な商業圏も形成されていないジンゴゲ居住が、満足なものだったはずがない。彼らはジンゴゲの敷地を得た直後から、南大門路と鍾路に進出しようとしたが、清商の圧迫と朝鮮商人の抵抗のために簡単には思い通りにすることができなかった。1891年に「露店営業規則」を制定して巡査を置き始めたのも、日本商人の中心商街進出を助けるためだった。日本人は、1894年の日清戦争で日本が勝利した後になってようやく南大門路に進出することができた[17]。これを契機に1897年には日本領事館、日本居留民総代役

---

[13] 日本人のソウル居留経緯とその拡大過程に関しては、全遇容「日帝下ソウル南村商街の形成と変遷—本町を中心に」『ソウル南村—時間、場所、人』ソウル学研究所（전우용「일제하 서울 남촌 상가의 형성과 변천—本町을 중심으로」『서울 남촌—시간, 장소, 사람』서울학연구소）2003年を参照。

[14] 李揆穆/キム・ハンベ「ソウル都市景観の変遷過程研究」『ソウル学研究』（이규목·김한배「서울 都市景觀의 變遷過程研究」『서울학연구』）2、1994年、17頁。

[15] 小春「ソウル中心勢力の流動の昔と今（예로 보고 지금으로 본 서울 中心勢力의 流動）」『開闢』48、1924年6月、56頁。

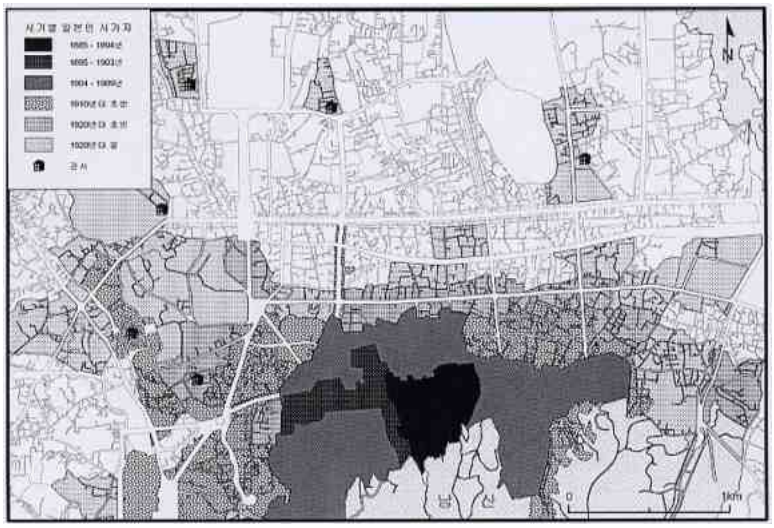
[16] 京城府『京城府史』2、1934年、577頁。

[17] 在京日本人商街の拡散過程に関しては、全遇容の前掲書（2003年）を参照。

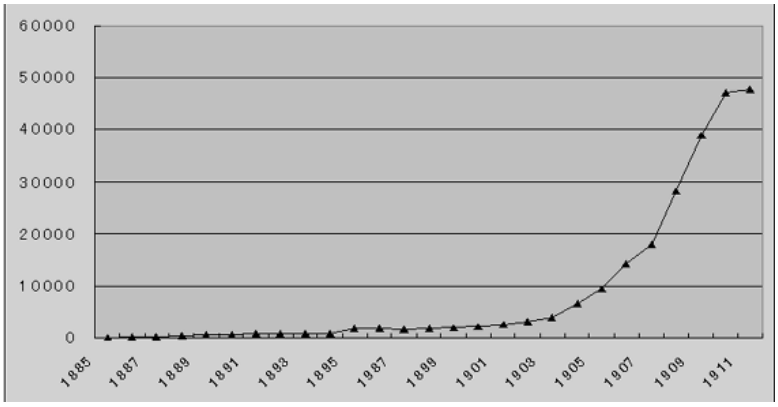
場、商業会議所がすべて南大門通とジンゴゲの接続地、後の本町1丁目に移転・新築された[18]。この道が本町1丁目になるのを可能にした空間的基盤の造成が完了したのである。

一方、日清戦争勝利を背景として、日本人の新規移住も急速に拡大した。1885年当時、ソウル居留日本人の人口は89人に過ぎなかったが、10年後の1894年にはその10倍近い848人に増加した。在京日本人の人口は日本の日清戦争勝利を契機に急増して1895年には1,839人に増加し、日露戦争以後に再び急増を繰り返し、1910年には47,148人に達した。

＜図1＞日本人居留地の拡散過程



＜図2＞ 京城居留日本人人口の変化（1885-1911）



※京城商業会議所『京城商業会議所月報』23（1918年）を元に作成。各年12月末現在。
※1903年以後は龍山居住人口を合算。

[18] 京城府『京城府史』2、1934年、664-665頁。

日本人の新規移住者も既存居留地とその周辺に居住および商業活動の拠点を置いた。彼らは本町を中心として西側には南大門路、北には旧清国人居留地（黄金町＝現在の乙支路）一帯、東には奨忠壇公園周辺、南には龍山に至る地域へと、次第にその住居空間を拡大していった。彼らが清渓川を越えて北進することができなかったのは、韓国政府と結んだ居留地約定が依然として有効だったのに加え、鍾路一帯の朝鮮人商人たちが彼らの北村進出に強力に抵抗したためである。この様相は、日本による韓国強占後にも長い間変わらなかった。1914年の行政区域調整当時、京城府は清渓川を境界にして85箇所の洞と101箇所の町に区分した。清渓川以北と以南はおおよそ同じくらいの面積だったが、清渓川以南は日本人が多数居住する地域だということで、すべて町という地名にした。

ソウル居留日本人の数が増加するのにしたがって、元の居住地から追い出される朝鮮人の数も増加した。南村にはすでに大勢の朝鮮人が住んでいたため、日本人がここに居住地を構えるには朝鮮人の既存家屋を購入したり賃借したりしなければならなかった。1905年に日本が韓国の内政を事実上掌握した後、仕官の道を完全に絶たれた南村居住の朝鮮人両班が、最初にその犠牲になった[19]。そして一般平民がその後を追った。在京日本人の人口は日本の韓国強占以後も持続的に増加し、その増加の幅は朝鮮人のそれをはるかに上回った[20]。新しく移住してきた日本人は、既存の居留地周辺に押し寄せ、そうなればなるほど南村から追い出される朝鮮人の数も増加した。そのうえ日本人は「数年を出でずして財産家になる無数の移住民乞食」[21]といわれたように、一文無しで移住してきた場合でも既存日本人社会のネットワークを利用して、または日本民族という「優越な」地位を利用して、短い期間に相当の富を蓄積することができた。特に1913年から本格化した市区改定事業は日本人に莫大な土地財産をまとめて与えることになった。市区改定事業の計画街路が南村日本人の便宜を最優先に考慮して設定されただけでなく、関連開発情報

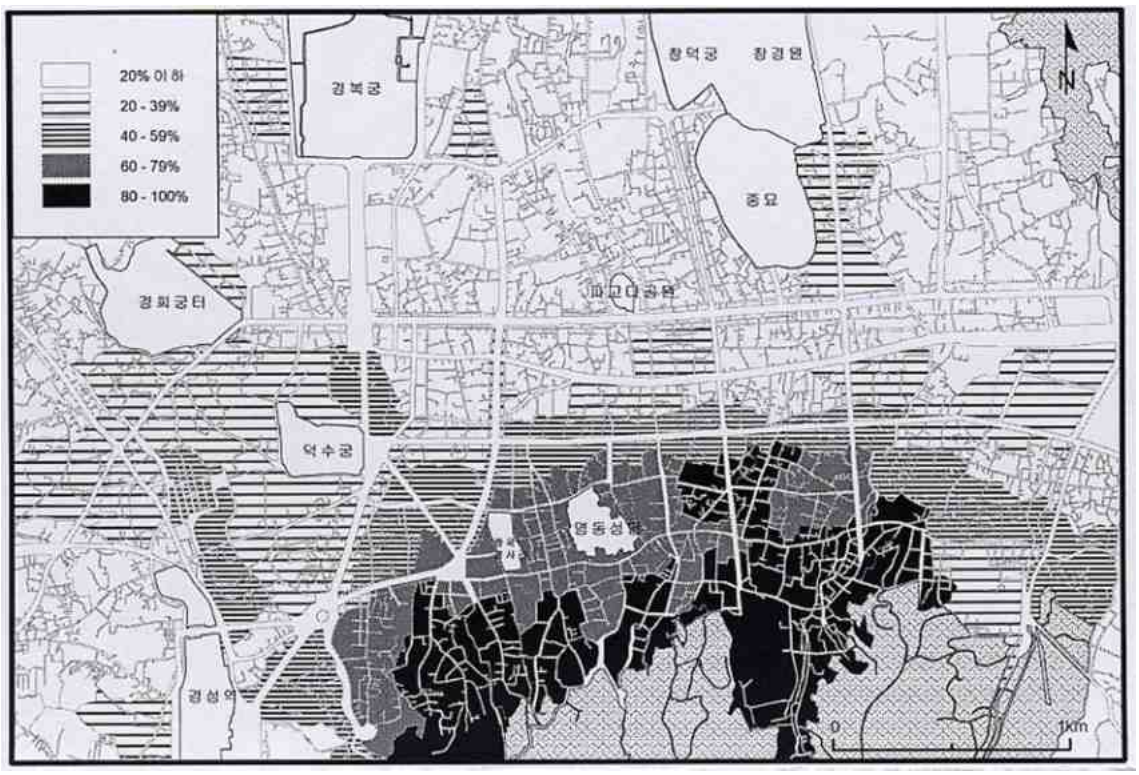
＜表1＞京城府総人口と朝鮮人・日本人の数

	1914	1915	1920	1925	1930
朝鮮人	187,176	176,026	181,829	247,404	279,865
日本人	59075	62,914	65,617	88,875	105,639
京城人口	246,251	241,085	250,028	342,626	394,240

※資料：1914, 1915, 1920年は朝鮮総督府『朝鮮総督府総計年報』、1925-30年は『国勢調査報告書』。
※キム・ヨングン「日帝下日常生活の変化と性格に関する研究―京城の都市空間を中心に」延世大学校社会学科博士学位論文（김영근「일제하 일상생활의 변화와 그 성격에 관한 연구―경성의 도시공간을 중심으로」연세대학교 사회학과 박사학위논문）、1999年、60頁から引用。

[19] 「だんだんと、黒い服を着たスッテガリ（蓬のような もじゃもじゃ頭（をした人））たちがこの南村一帯を侵犯していくのと同時に、そっと群れをなして逃げて行くのは両班であった。」 鄭秀日「ソウルの味、ソウルの情操―ジンコゲ（서울 맛, 서울 정조―진고개）」『別乾坤』1929年10月、46頁。
[20] ウン・ギス「解放前後南村住民構成の変化」『ソウル南村―時間、場所、人』ソウル学研究所（은기수「해방전후 남촌 주민구성의 변화」『서울 남촌― 시간, 장소, 사람』서울학연구소）2003年、278頁。
[21] 中間人「外人の勢力から観た朝鮮人京城（外人의 勢力으로 觀한 朝鮮人京城）」『開闢』48、1924年6月、39

＜図3＞洞町別日本人人口比率(1929)



が日本人に対してだけ流れたために、彼らは土地取得や質入などにおいて法外な便宜を受け、簡単に富を手にすることができた[22]。よって彼らは朝鮮人よりももっと広い面積を占有することができ、そのために「日本人1戸の増加は朝鮮人5～6戸ないし幾十戸の減退を意味」[23]する状況をもたらした。南村の中心部は今や朝鮮人を探すのが困難な日本人の「独居地」になったのである。

南山の麓の場合、居住者全体の中で日本人が占める比重は80～90％に達した。これらの地域に居住する朝鮮人はごく少数で、さらに性別比が極度に歪曲されており、これは朝鮮人が世帯単位ではなく個人単位で日本人家庭に従属していたことを示している[24]。朝鮮人は、日本人と混じって暮らすのを嫌ったのか[25]、その反対だったのか、またはその両方だったのだろう。南村が日本人の「独居地」になるのにともない、この一帯は「支配者の空間」となり、その位相は逆転した。

ところが、南村の面積は北村とおおよそ同じだったのにもかかわらず―実際には、北村には宮闕や官衙などが密集していたため、民家が建てられる面積はむしろ小さかった―1925年の時点で南村の人口はソウルの人口の24.2％に過ぎなかった。南村に居留する日本人の数の増加よりはるかに速い速度で北村の過密度が進行したのである。よって朝鮮人が多く居住する地域は場合

頁。

[22] 孫禎睦『日帝強占期 都市計画研究』一志社、1990年、113頁（韓国語）。

[23]中間人「外人の勢力から観た朝鮮人京城」『開闢』48、1924年6月、52頁。

[24] ウン・ギス 前掲論文、2003年、286頁。

[25] キム・ヨングン 前掲論文、1999年、76頁。

＜表2＞ソウル南村の民族別人口構成(1925)

	日本人	朝鮮人	外国人
民族別人口	43,643	37,210	1,949
南村人口総数	82,802		
南村人口/ソウル人口	24.2%		
南村日本人/全体日本人	49.4%		
南村日本人/南村人口	52.7%		

※『朝鮮國勢調査報告書』(1925年)を元に作成。

によって1人当たり5坪未満の空間しか占有することができない状態になった[26]。この点は、次の表を通しても確認することができる。朝鮮人の場合、世帯当たりの平均土地所有は日本人の約59%であり、1人当たりの土地所有は約45%に過ぎなかったのである。南村がかなり広い庭園のある和洋折衷式、または朝鮮式と日本式折衷の文化住宅で覆われたのとは反対に、北村では既存の広い敷地が分割され、小規模の住宅が次々と建つという変化が起こり始めた[27]。それだけではなかった。都市の貧民窟の出現もやはり日帝の強占の直接的産物であった。朝鮮時代から大韓帝国期に至るまで、都城内には貧民窟の存在は許されなかったが[28]、日帝の強占後、失業状態に陥った元々京城に居住していた朝鮮人や、土地調査事業や産米増殖計画などの植民地農政によって没落した地方から京城に押し寄せてきた多くの農民で、相当規模の貧民集団が形成された。彼らはそうでなくても窮屈な北村で「行廊暮らし(召使)」として生き延びるのでなければ、城壁周辺や都市外郭に「土幕」を作って住まなければならなかった。1920年代には朝鮮神宮の造営、公設運動場の竣工などによって南村一帯から追われる貧民も大きく増加した[29]。北村だけではなく、朝鮮人が多く居住している地域はどこも「貧民」問題に苦しみ、さらにそれだけ朝鮮人居住地域には「貧民地区」だというイメージがかぶさった。

ところで、ひとつ特異な現象は、南村と北村が異なる階層の居住空間として明確に区分され始めたのにもかかわらず、朝鮮人の富豪や有力者、さらには日本から爵位を受けた新貴族さえも南村に新しく居住するという事例はほとんど発見されないという点である[30]。居住地が階層別に分離される現象はどの都市でもみられることだが、植民都市京城の場合は階層別分離よりも民族別分離の傾向がはるかに強力でかつ支配的だった。そしてその分だけ、南村と北村はそれぞれ日本

[26] 『朝鮮日報』1924年10月12日「人口において滅亡していく朝鮮人京城の運命(人口로 滅亡해 가는 朝鮮人京城의 運命)」。
[27] 孫世寛「ソウル20世紀住居環境の変遷」『ソウル20世紀空間変遷史』ソウル市政開発研究院(손세관「서울 20세기 주거환경의 변천」『서울 20세기 공간변천사』서울시정개발연구원)2001年。
[28] 野崎真三「京城貧民窟に就て」『朝鮮公論』14-3、1926年3月、19頁。
[29] 前掲論文、22頁。
[30] 筆者は『朝鮮紳士名鑑』(1910年)『現代漢城の風雲と名士』(1910年)、『京城市民名鑑』(1921年)『朝鮮紳士録』(1931年)など1910年代から1920年代後半期までの間に発刊された主要人名録を検討してみたが、1910年前後の宋秉畯以外には南村に居住する朝鮮人有力者は発見できなかった。その宋秉畯さえ強占以後のある時点からか北村桂洞に移住した。

人と朝鮮人を表象する空間としてみなされることになった。

＜表3＞1917年現在の世帯別・個人別の土地所有現況（単位;坪）

国籍別	世帯別平均土地所有	1人当たり平均土地所有
朝鮮人	*41.0*	*8.9*
日本人	*70.8*	*18.7*
中国人	*49.3*	*11.9*
その他（西洋人）	*869.2*	*365.7*

※姜秉植『日帝時代ソウルの土地研究（日帝時代 서울의 土地研究）』民族文化社、1994年、130頁。

＜表4＞京城府内：戸別税の民族別納付状況（1924）

区分	総世帯数	納税人員	所得税	納税人員比
朝鮮人	40,729	2,395	6,048,050	17戸当たり1人
日本人	18,142	9,559	22,796,250	2戸当たり1人
その他の外国人	815	149	1,117,700	3戸当たり1人
計	59,686	12,103	29,962,000	

※東亞日報の記事（1924年7月4日）より作成。（姜秉植、前掲論文、95頁）

日帝強占期、南村と北村はすべての面において対照的な2区域（district）だった。日本人と朝鮮人という民族帰属の違いは他のあらゆる階層別、性別、出身地域別の違いを圧倒する規定的要因だった。その点で、1920年代の京城の都市空間は、民族問題を副次的なものとしようとする企てを受け入れはしなかった[31]。

要するに、南村と北村を分ける清渓川(edge)は植民地支配者と被支配者の間隔を表象するものであり[32]、同時に富者と貧者をそれぞれ象徴するものだった。一部の日本人はその間隔を朝鮮人自体の劣等性に求めたが[33]、事実その間隔は、日本人行政官が自ら「実に北部に対して申し訳ない」と告白せざるをえないほど[34]、植民地権力の極度の差別的な行政によって持続的に拡大

[31] 巻頭言で言及したように、1930年代の資本主義的都市化の様相に圧倒されて、民族問題を副次的なものとする研究が量産されているが、1930年代に生産されたテクストが1920年代のもののように「自由に」作られたものだったならば、1930年代に対してもそのような認識は成り立ちえないはずである。

[32] 全遇容「清渓川と川辺；空間と象徴の歴史的変遷」『清渓川―時間、場所、人』ソウル学研究所（전우용「청계천과 천변 ; 공간과 상징의 역사적 변천」『청계천－ 시간, 장소, 사람』서울학연구소）2001年、25頁。

[33] 一例として、ある日本人はソウルの公衆便所問題に対して次のように述べている。「京城は人口30余万都市として不足はないが、人口の約6分の1が内地人で、残りは全く衛生思想のない鮮支人だ。……彼らは空き地や、家と家の間の狭い空間や、または下水溝に大小便をしている。……公衆便所を設置しても彼らが続いて使うせいで一朝一夕のうちに足を付けることもできないほど汚れてしまい、他の通行人が入ろうとしても一歩も入ることができず、とうとう再び出てきてしまう。……付近に居住する鮮支人のための共同便所になった感があるため、京城府はむしろ公衆便所をすべて撤廃しようとまで考慮中なのである」。原因と結果を混同した支配民族の認識錯乱がこれほど極端だったのだから、南村と北村の極端な差別は当然のことだったのだろう。（一記者「京城府の現在と将来」『朝鮮公論』16-7、1928年7月、34-35頁。

[34] 1924年当時、京城府土木課長だった河野の話。（『東亞日報』1924年3月22日「血税代価で所得を得るとは」

されていたのである。このような現状に対して朝鮮人が「頭にくるほど残忍な差別をする」と言って怨恨を露骨に表すようなことがなかったとしたら、それはむしろ異常なことだったであろう[35]。

3．新しい建造物

ソウルに日本人居留地が作られるのと同時に、日本人の建築行為も始まったが、彼らの建築行為がソウルの朝鮮人一般にまで有意味なものに変化したのは日露戦争の後、具体的には韓国銀行社屋新築（1909年）以後のことだった。以後日本人は、公共建物の新築と関連して全権を掌握した。新規公共建物の用途、規模、位置は日本人支配者が一方的に決定したもので、彼らの建築行為はソウル都市空間のイメージを根本的に変えた。

開港以後、日本人居留地がジンゴゲから形成された事情と関連して、日帝強占期の主要官公署はすべて（1926年以降の総督府を除外すると）南村に、それも慶運宮（徳寿宮）の向かい側の京城府庁を中心に四方1km 以内に設置された[36]。1920年以後から、市区改定事業などを利用して巨富を蓄積した日本人民間資本家も、先を争って新規商業建築物を築造し始めた。1905年から1920年までに、南村に築造された主要近代建築物は＜表5＞の通りである。反面、1907年に建立された YMCA の建物と1921年に完工された天道教大教堂などの宗教建築物以外にはランドマークになる建物はなかった。1926年に朝鮮総督府庁舎が景福宮の前を遮って建てられるまでは、朝鮮総督府病院（1907年、大韓医院本館の建物として新築）が北村の唯一の公共建物だった。

1927年のある雑誌記事は、北漢山からソウルを眺望する形式をとってソウルでランドマークになりうる建物を紹介しているが、南村に所在するのは朝鮮銀行、京城郵便局、商業銀行、明洞聖堂、東洋拓殖会社などを主軸として聳え立つ高層建物であったのと反対に、北村に所在するのは旧宮闕や学校など広い平面を確保するだけの建物で、ランドマークの役割を果たすことのできるものはなかった[37]。

1920年代前半までに築造された大規模建造物は、総じて官衙の建物や国策会社・銀行などの社屋であったため、建造物の位置および建物様式は植民地権力の意図をそのまま反映するものだった[38]。植民地権力は近代的で威圧的な高層建物を南村に集中させ、この地域を京城において、さらには全朝鮮において最も近代色の濃い地域にし、そうすることで南村と北村の伝統的な

（『東亞日報』1924년3월22일「血税代價로 所得이 何」）。

[35] 「外人の勢力から観た朝鮮人京城」『開闢』48、1924年6月、45頁。

[36] 日帝の京城府官衙配置計画は、明治維新直後に日本政府が企図した「日本橋中心10里四方の様式化」をそのまま踏襲したものだった（孫禎睦『日帝強占期　都市計画研究』一志社、1990年、111頁）。

[37] この雑誌に紹介されている場所・建物は次の通りである。総督府、京畿道庁、法学専門学校、逓信局、朝鮮歩兵隊、徳寿宮、京城中学校（慶熙宮）ラジオ放送局、ソ連領事館、梨花女学校、培材学校、独立門、西大門刑務所、南大門停車場、新龍山と旧龍山、南大門、朝鮮銀行、京城郵便局、商業銀行、殖産銀行、天主教堂、東洋拓殖会社、鍾閣、タプコル公園、基督教青年会館、鍾路警察署、昌徳宮、宗廟、昌慶院、総督府病院、京城帝国大学、高等商業学校、高等工業学校、普成高等普通学校、東大門、纛島水道局、中央高等普通学校、徽文高等普通学校、京城女子高等普通学校、別宮、侍天教堂。（「無学大師新京城求景」『別乾坤』2-7、1927年11月、92-94頁）。

[38] 李揆穆「ソウル近代都市景観を読む」『ソウル20世紀空間変遷史』ソウル市政開発研究院（이규목「서울 근대

＜表5＞南村の主要近代建築物

竣工年度	建物名	所在地
1907	統監府庁舎（後に朝鮮総督府庁舎） 漢湖農工銀行（朝鮮殖産銀行、1923年増築）	南山の麓 南大門通2丁目
1908	広通館(大韓天一銀行、手形組合)	南大門通1丁目19
1911	東洋拓殖株式会社	黄金町2丁目195
1912	漢城銀行 朝鮮銀行	南大門通1丁目14 南大門通3丁目110
1914	朝鮮ホテル	長谷川町
1920	京城商業会議所	長谷川町
1922	京城株式現物取引市場	黄金町2丁目199
1923	総督府立京城図書館	長谷川町6
1924	朝鮮商業銀行 京城日報社	南大門通2丁目111 太平通
1925	本町ビルディング 京城本町綜合ビルディング 京城駅	本町2丁目 本町1丁目 蓬莱町1丁目
1926	京城府庁 南大門ビルディング	太平通 南大門通 5丁目1
1928	京城電気会社社屋 中央ホテル 京城府立図書館	黄金町 2丁目 吉野町 長谷川町 115
1929	商品陳列館 京城銀行集会所	南大門通 長谷川町 112

※尹仁石「南村の近代建築物」『南村―時間、場所、人』ソウル学研究所（윤인석「남촌의 근대건축물」『남촌-시간, 장소, 사람』서울학연구소）、2003年を参照。

イメージを逆転させた。これによって南村は植民都市京城の新しい空間的中心であるとともに、植民地全域の文化を調律する文化的中心になった。地方からソウルに見物に来る人々は、北村の旧宮闕よりもまず南村の新しい文物と新しい建物を訪れるようになり[39]、それを通して変化した政治的状況を脳裏に刻んだ。また、新しい建造物はみな同じように権威的なルネサンス様式で築造され、植民地権力の威圧性を可視的に表現した。

日帝植民地権力は、官庁及び公共建物を築造する過程で、多分に意図的な位置選定を通して奇妙なコントラストを作った。植民地権力が選定した官庁及び公共建物の位置は、総じて朝鮮人が神聖で厳かなイメージを付与していたところだった。旧宮闕や官衙のあった場所に新しい公共建物や施設を配置したのは、明治維新後に東京の大名邸宅を公園敷地や学校敷地として活用した経験と無関係ではないはずである。しかしそれと場所との関係の在り方には、単純に植民地原住民に対する配慮不足や誠意のなさに起因するものだと断定するのは難しい点がある。既存の建物・施設の痕跡を象徴としてだけ残しておいたまま、その施設と同時に眺望できる位置に大規模の建築物を築造することが、ひとつのパターンのようになっていた。ベンヤミン（Walter Benjamin）は、どの都市においても新しい権力集団は当時の政治的変動を誇示するために伝統

도시경관 읽기」『서울 20세기 공간변천사』서울시정개발연구원）2001年、114頁。
[39] 春坡「ソウル見物に来て忘れてしまうこと（서울구경 왔다가 잊어버리고 가는 것）」『別乾坤』4-6、1929年10月、131頁。

的・歴史的な知識を破壊したと述べた[40]。だが、日帝植民地権力の建物築造は、過去に対する集団的記憶を破壊する水準の超え、それを歪曲しようとする意図を含んでいた。

まず、旧宮闕とその周辺が一次的なイメージ歪曲の対象になった。もともと朝鮮王朝の正宮として建立され、大院君が改築した後に正宮としてのイメージをより強化させた景福宮は、日帝の韓国強占直後の1910年9月からすぐに毀損され始めた[41]。景福宮を毀損した名分は「公園造成」だったが、「造成」というよりも「毀撤」自体が目的だった。日帝は韓国強占直後から朝鮮王朝の記念碑的象徴物を一掃しようとしたのだった。このとき破壊を免れた景福宮の残りの殿閣も、勤政殿と慶會会楼以外は1915年の朝鮮物産共進会を目前に、全面的に撤去された[42]。景福宮殿閣の撤去に続いて、朝鮮総督府新庁舎の建築工事が始まった。総督府新潮社の竣工を目前にした1926年8月初めに、景福宮の正門だった光化門が東側に移転した[43]。植民地権力は、当初光化門を壊してしまおうとしていたが、日本人さえもその非文化的な行為を非難したため、やむを得ず移転の方針に転換した。

純宗の居所だった昌徳宮と併せて単一宮闕のように使用されていた昌慶宮は、動物園・植物園・博物園で構成された公園になった。1907年に宮内次官小宮三保松は、当初昌慶宮を純宗皇帝の散歩や憩いの場所にするという名目で動物園や植物園を造成したが、動植物がある程度集まるが早いか(1909年)一般に開放してしまった[44]。大韓帝国の正宮として使用されていた慶運宮(徳寿宮)は高宗の生存時には規模が縮小された形で何とか維持されたが、高宗の死後一時的に京城府庁舎建築地として検討されたが[45]、1932年8月公園として開放された[46]。慶運宮の前には1926年に京城府庁舎が新しく建立された。

大韓帝国期に、虹橋で慶運宮と連結されて補助宮闕の役割をしていた慶熙宮の敷地の一部に統監府中学校が建立されたのは1909年のことで、1911年6月には残りの敷地と建物すべてが総督府に移管されて王室財産から除外された。総督府は1926年から慶熙宮域内の建物を逐次民間に払い下げた。正殿だった崇政殿と會祥殿を壊して大和町3丁目の曹渓寺に移動し、興政堂は西四軒町の光雲寺に、正門だった興化門は博文寺に移動した。殿閣の毀損・移転と時を同じくして、宮址も大きく縮小された[47]。

その次には、大韓帝国期に「自主独立」または「反日」の象徴として建立・設置された建造物とその周辺が、新しい建造物によって威圧された。日帝は1909年に帝国の象徴として建造された円丘壇のあった場所に、一時土管製造所を設置したが[48]、1914年には円丘壇をすっかり撤去してそ

---

[40] Mike Savage 他、キム・ワンベ/パク・セフン訳『資本主義都市と近代性』ハンウル(Mike Savage 외、김왕배·박세훈 역『자본주의 도시와 근대성』한울) 1996年、175頁。
[41] 『毎日申報』1910年9月28日「宮基公園」
[42] 「京城の名勝と古蹟(京城의 名勝과 古蹟)」『開闢』48、1924年6月、106頁。
[43] 『朝鮮日報』1926年8月9日「姿を消した歴史の深い光化門(蹤迹을 감추는 歴史 깊은 光化門)」。
[44] 下郡山誠一「昌慶苑の今昔感」『朝鮮及滿洲』354, 1937年5月、69頁。
[45] 『朝鮮日報』1923年2月10日「府庁新築は徳寿宮(府廳新築은 德壽宮)」。
[46] 『東亜日報』1932年8月1日「徳寿宮開放を正式に発表(德壽宮 開放을 正式으로 發表)」。
[47] ソウル市史編纂委員会『ソウル六百年史』4、ソウル特別市(서울시사편찬위원회『서울육백년사』4、서울특별시) 1981年、442頁。
[48] 京城府『京城府史』2、1936年、429頁。

の跡地に鉄道ホテルを建てた[49]。唯一、境内の皇穹宇と石鼓壇だけはそのまま残されたが、このために太祖と天地の神位を祭った皇穹宇はホテルの装飾品に転落してしまった。主となる建物が破壊されて残った付属建物は、超現代的なホテルの建物のそばで、大韓帝国の記念碑的建物がどれほどみすぼらしいものなのかを表象する役割を担当した。大韓帝国の独立を象徴する最初の記念物だった独立門周辺も、イメージ歪曲の対象になった。独立門と共に眺望される位置に、当時としては超現代的な西大門監獄が建てられたのは1907年のことだったが[50]、「独立」という単語に神経質な反応を示した植民地権力がその前にある独立門を残したことは、一見すると怪訝なことである。恐らく「独立」と「監獄」という2つの単語が一連の連想作用の中で定着するようにしようという意図だったのではないかと思われる。

当初乙未事変の犠牲者を称える目的で設置され、後に国家のために犠牲になった殉死者一般を称える聖所として位置付けられるようになった奨忠檀周辺は、極端なイメージ逆転の対象になった。奨忠檀のそばの雙林洞一帯が遊郭のための敷地として割り当てられ、新町遊郭という当時の朝鮮人たちが聞いたことも見たこともなかった売淫窟が登場したのは1904年のことだった[51]。日本人が大韓帝国の聖所を売淫窟として嘲弄しようという確実な意図をもっていたのかどうかは定かではないが、どちらにしてもそのイメージの逆転は朝鮮人に大変な屈辱感を与えたはずである。数百年間都城の関門として機能していた南大門のすぐ前に、1925年に京城駅舎が雄壮な姿で建てられた。南大門周辺の城郭は、すでに1907年7月に日本の皇太子の訪韓を契機に一部が破壊され、1908年2月に日本人内務次官木内重四郎の主導で城壁処理委員会が新設された後には、門楼だけを残したまま一帯の城壁が完全に撤去された[52]。城壁がなくなり門楼だけがみすぼらしい姿で残された南大門は、京城駅舎と朝鮮神宮に左右を包囲されて王朝の没落を象徴する建物となった。高宗皇帝の稱慶記念碑閣の正門も、三一運動の後、日本人の古城梅渓に売られ、個人の別荘の門になってしまった[53]。南村の唯一の大型国家記念施設だった永禧殿は1909年に撤去され、その跡地は長い間空き地として残っていたが、後に水道事務所(1922年)が建てられた[54]。

中世ソウルの案山として神聖視された南山国師堂の跡地には、官幣大社朝鮮神宮が建てられた。朝鮮神宮の場合、併合直後の1912年から朝鮮総督府庁舎と共に敷地が物色されていたが、朝鮮総督府庁舎を景福宮の前に建てることにし、神宮はこれに対応する位置にある南山に設置することが決定された。景福宮の前の朝鮮総督府新庁舎と南山の麓の朝鮮神宮は、互いに向かい合って京城を完全に空間的に制圧する象徴になった[55]。

ところで、王朝時代の宮城や官衙などの主要なランドマークを破壊して自国内で流行していた

---

[49] 京城府『京城府史』1、1934年、852-853頁。
[50] イ・キュモク/キム・ハンベ、前掲書、26頁。
[51] 京城居留民団役所『京城発達史』1912年、129～130頁。
[52] 京城府 前掲書、1936年、292頁。
[53] 京城府前掲書、1934年、698頁。
[54] キム・ハンベ、前掲論文、95頁。
[55] モク・スヒョン「「南村」文化―植民地文化の痕跡」『ソウル南村―時間、場所、人』ソウル学研究所(목수현「'남촌'문화― 식민지 문화의 흔적」『서울 남촌― 시간, 장소, 사람』서울학연구소)2003年、242頁。

ルネサンス式の建物で代替させることは、当時帝国主義国家において一般的に用いられた方式だった[56]。ただし、日本の植民権力が京城で行った方式は既存のランドマークの一部をみすぼらしい状態で残しておき、規模も様式も新しい建物と極端に対比されるようにした点で、特徴的である。このように定型化された建築行為の結果、当時の朝鮮人は日本人の新規建造物と朝鮮王朝の旧建物を常に一組のものとして認知した。景福宮―総督府新庁舎／徳寿宮―京城府庁舎／南大門―商工奨励館／円丘檀―鉄道ホテルなどが同時に眺望され、これはそれぞれ旧朝鮮と新朝鮮（日本支配下の朝鮮）を代表するイメージ要素として直ちに認知されたのである。このような建物配置は、朝鮮人住民が持っていた場所のイメージをそのまま延長しつつ、その場を「日本の支配」で充たすものだといえる。そして、同一空間、同一視野において「野蛮と文明」または「みすぼらしさと雄壮さ」が極端な形で対比され、これは朝鮮人の自意識形成に持続的かつ反復的な影響を与えた。京城の都市空間は、「朝鮮的なすべてのもの」を蔑視・否定しろというメッセージを伝達するテクスト(text)となった。

＜図4＞　景福宮の敷地にある朝鮮総督府

＜図5＞西大門刑務所

＜図6＞独立門

[56] キム・ハンベ、前掲論文、95頁。

＜図7＞鉄道ホテルと皇穹宇

＜図8＞徳寿宮から眺めた京城府庁舎

4． 街路環境

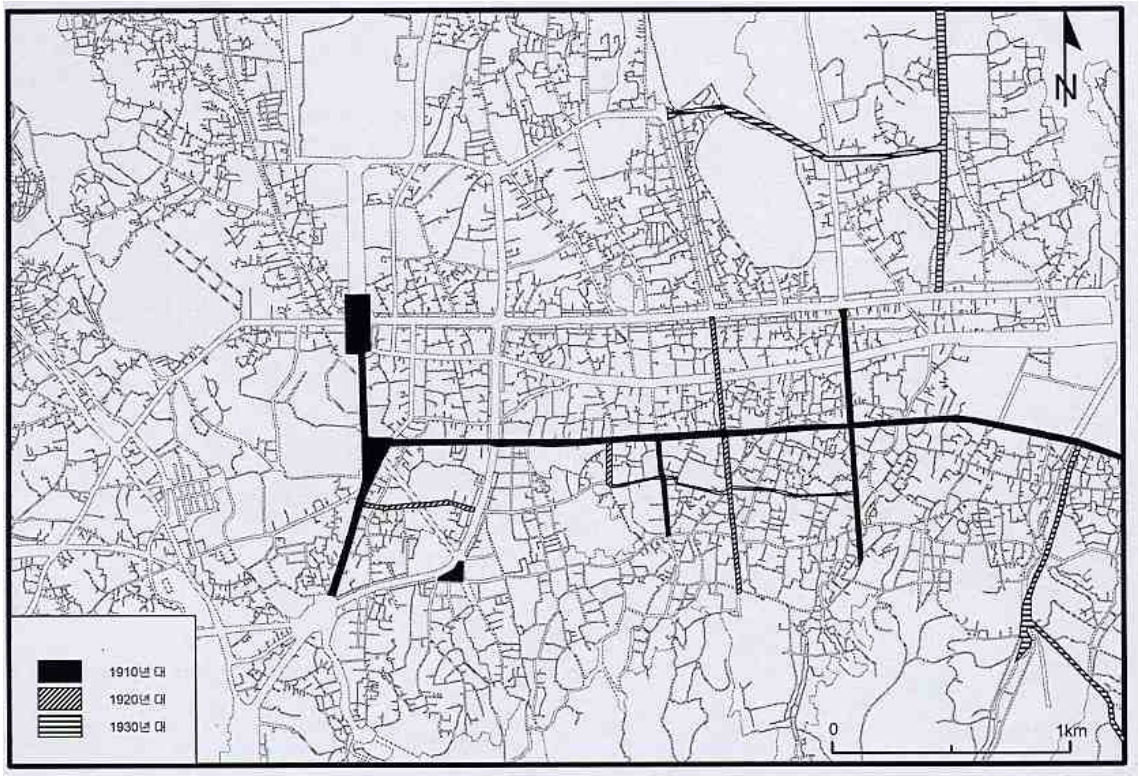
朝鮮時代のソウルの道路網は、景福宮の前－鍾路間の六曹通り、鍾路、南大門—鍾路間の南大門通の3大幹線道路を基本としていた。特に鍾路と南大門通が交差する「鍾路四街」はソウルの中心点(node)として認知されてきた。1896年以後、日本人居留地の中心道路である本町通と南大門路が交差する地点（鮮銀前広場、node)に日本領事館、居留民団役所、京城郵便局などが逐次建てられ、この地点が京城に居留する日本人の中心点として新しい象徴性を獲得した[57]。以後、この2地点は日帝強占期の間ずっと、それぞれ朝鮮人と日本人を象徴する地点として認知された。

日本人がソウルの街路網に手を付け始めたのは1896年ごろからだったが、当時の街路の改修は南大門路から本町通までの日本人居留区域に限定されたものだった[58]。京城の街路体系が日帝植民地権力によって大規模に変化し始めたのは、植民地化の前後の時期からだった。日帝は1909年から黄土峴から南大門までの太平通と、徳寿宮から旧クリゲ道（現在の乙支路）を横切って光熙門に至る道路（黄金町通）を開削し始めたが[59]、道路の新設・拡張は1912年10月7日、市区改修に関する訓令（総督府訓令第9号）を契機に年次計画の下で推進された。1913年から本格化した市区改修事業の結果、総21,325m の道路と225m の広場が整備・造成された[60]。だが、＜図9＞にあるように、1910年代に新設・拡張された道路は、大漢門の前から旧クリゲ道を横切って光熙門に至る道路（黄金町通）以外は、すべて南北方向の道路だった。

---

[57] 全遇容、前掲論文、183頁。
[58] 全遇容、前掲論文、2003年、181～182頁。
[59] 太平通と黄金町の道路の開削・改修過程については、キム・ギホ「日帝時代初期の都市計画に関する研究—京城府市区改定を中心に—」『ソウル学研究』（김기호「일제시대 초기의 도시계획에 대한 연구—경성부 시구개정을 중심으로 -」『서울학연구』）6、1995年を参照。
[60] 孫禎睦、前掲書、1990年、105頁。

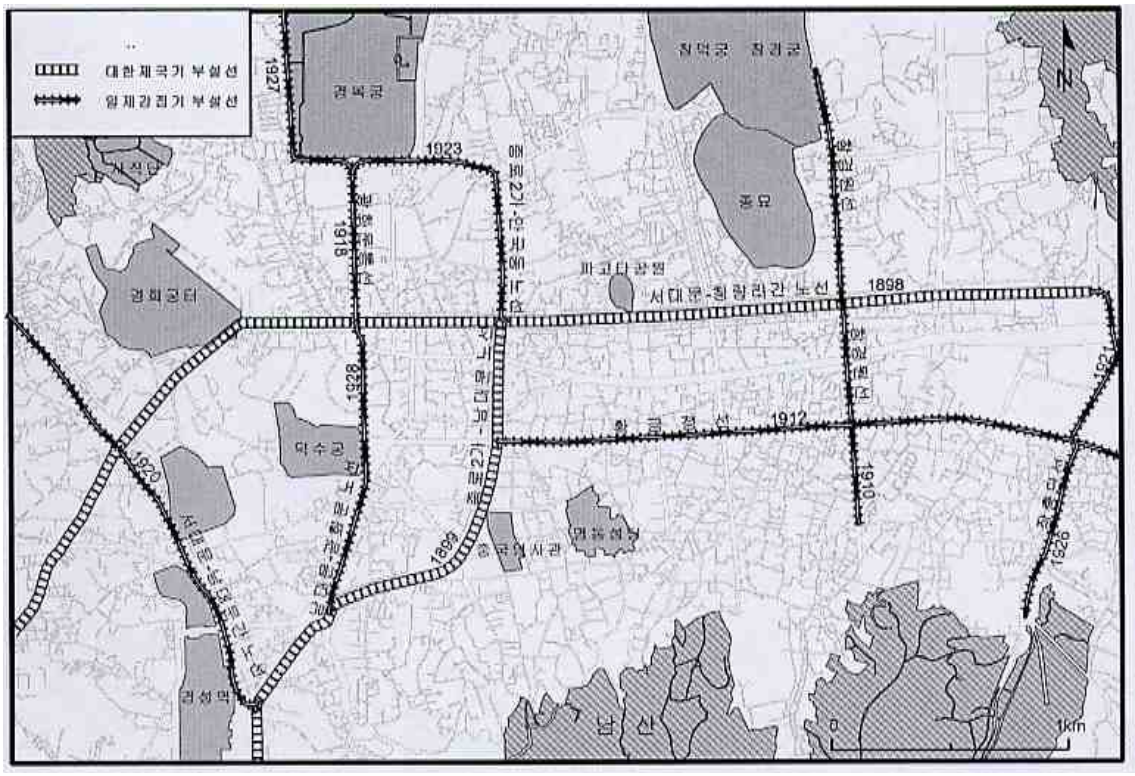
＜図9＞京城中心部の時期別街路網の変化



まず黄金町通の改修は、朝鮮王朝開創以来「国中の大路」として機能し、都城の中心街路として認知されてきた鍾路に比肩される、もう1つの中心街路を作る事業だった。この道路が開通したことで黄金町は南村の中心街路になり、京城の都市構造の中心も南側に移動した[61]。黄土峴広場から南大門までの道路（太平通）は壮大なバロック的直線景観軸を通して植民地権力の威圧的権威を表象すると同時に、有事の際に京城を軍事的に迅速に制圧するためのものだった[62]。また永楽町道路は本町、明治町、旭町など南村の日本人居留地の中心地域と新設の黄金町の道を連結することで南村住民の便宜を増進するためのものであり、東西四軒町から総督府病院（昌慶苑）までの道路も、やはり京城唯一の慰安・衛生施設への南村住民の接近を容易にするためのものだった。南村中心の市区改修は、総督府が景福宮の前に移転した1920年代にも同様に続いた。図のように、1920年代には主に南村内の既存街路を延長し、塞がったところを新しく貫き、南村一帯の道路網を格子型にすることに重点が置かれた[63]。これによって、北村が市区改修で排除され依然として過去の「曲がりくねった」路地一色だったのとは反対に、南村の街路はすっきりと貫かれた「近代的道路」に変貌した。

[61] キム・ギホ、前掲論文、1995年、50-51頁。
[62] キム・ギホ、前掲論文、1995年、58頁。
[63] 孫禎睦『日帝強占期都市計画研究』一志社、1990年、158頁。

＜図10＞電車路線の変化



日帝強占期、道路に続いて電車路線も新設された。昌慶苑線（1910年）、新龍山線（1912年）、黄金町線（1912年）、本町4丁目線（1915年）などは市区改修事業で拡張・新設された道路に沿う形で日本人居住者と総督府、病院、昌慶苑などを結ぶ路線だった[64]。これは大韓帝国期に敷設された電車路線が、鍾路と南大門路、西大門―麻浦街路など既存の大通りおよび朝鮮人の商業中心地に置かれたこととは全く対比的なものだった。日帝強占期、北村には総督府と総督府病院周辺以外には電車線は追加されなかった。市区改修と電車敷設で面目を一新した南村の主要街路には、近代式高層建物が次々と建った。特に黄金町通と南大門通には東洋拓殖会社、朝鮮殖産銀行、商工奨励館、京城電気会社などの国策会社や銀行などの社屋が場所を占め、この2つの街路を京城の中心業務地区とした。その反面、太平通は新設道路であったものの朝鮮人居住地域だった関係で相対的にみすぼらしい姿を免れなかった（図を参照）。

新しい建造物だけでなく街路の新設においても、南北村道路間には深刻な差別があった。植民地期を通して、市区改修事業費以外の京城府の土木事業費は、ほとんど全額が南村の都市環境整備に使われた。本町に民間電灯が出現したのは1901年で、1910年以前にすでに街路灯が登場した。1910年以降、本町の街路灯維持費は京城府の負担となった[65]。京城府は黄金町と

[64] 李恵恩「大衆交通手段がソウル市発達に与えた影響：1899～1968年(大衆交通手段이 서울시 發達에 미친 影響 ：1899～1968)」『地理学』37、1988年、27頁。
[65] 『朝鮮日報』1931年3月14日「街路の電灯も日本人街ばかりに配置（街路의 電燈도 日人街에만 置重）」。

本町街路には随時水を撒いて清潔を保ち、1920年ごろには黄金町と本町の道路を舗装し[66]、1925年には舗装材をアスファルトにかえた[67]。道幅が狭いために歩道と車道を区分することはできなかったが、その代わりに1920年からは本町1～2丁目区間での牛馬車の通行を禁止した[68]。一方、数百年間「国中の大路」だった鍾路には、清渓川を浚渫してできた汚泥を撒き、四六時中埃が舞い臭いが漂う酷い状態のままで放置した。鍾路の真ん中のランドマーク(landmark)であり、漢城・皇城の象徴だった普信閣がゴミ溜めになってしまうほどであった。

＜図11＞太平通(左)と南大門通(右)

差別的な市区改修や差別的な道路整備の結果、南村の中心街路である本町と北村の中心街路である鍾路は、街路自体が明白に対比される2つの道(path)として認知され、それぞれの中心地帯である鮮銀前広場と鍾路四街は周辺の道路と建築物、道路を往来する人々まで含んで[69]、総合的に比較・対照される2つの代表的な地点となった。鮮銀前広場は南村を象徴する地点(node)であり、鍾路四街は北村を象徴する地点だった。鍾路を往来する人々の中には「五千年の歴史を持つ国の五百年の首都の中央大通りが、こんなにまで醜雑とは！　醜さの要点は人間どもだ」[70]といわれるほど貧しく垢じみた服を着た人々が多かったが、本町には「ジンゴゲ紳士」でなければ出入りすることが難しかった。北村はみすぼらしく非文明的なだけでなく、不潔で陰湿な空間として「再創造」された。

この2地点は、街路の規模、街路周辺の建築物や通行人の衣服など、あらゆる面で著しい差をみせたが、朝鮮人はこの2地点からそれ以上のものを感じた。朝鮮人はこの2地点を比較しながら、

[66] 『東亞日報』1924年3月22日「血税代価で所得を得るとは(血税　代價로　소득이　어떤가)」。
[67] 『東亞日報』1929年3月29日「道路改築請願」。
[68] 本町1-2丁目では、午後4時以降牛馬車通行が禁止された。(『朝鮮日報』1920年6月24日「市内運送業者　不満を訴えよ(市内運送業者　不滿을　訴하라)」。
[69] 都市とは外面的には無数の通行活動の集合として成り立つものなので、当然、通行人自体が街路景観の重要部分を構成することになる。(キム・ジンソン『ソウルにダンスホールを許可しろ―現代性の形成』現実文化研究、1999年、47頁。
[70] ネヌニ「醜い京城、美しい京城」(네눈이「醜로　본　京城，美로　본　京城」)『開闢48、1924年6月、117頁。

「一視同仁」の虚構性を明瞭に認知することができたのである。2地点の差は両民族の経済力や生活文化の差のみに起因するものではなかった。より根本的な要因は京城府の極めて差別的な行政にあり、朝鮮人は鍾路と本町を往来しながらその事実を自ずと看取することができたのである。

1920年代には、京城府の予算の70％程度が道路および都市河川管理費と清掃費だったが[71]、この予算の80％以上が南村に集中した。本町、黄金町、南大門通は1920年の時点ですでに舗装が完了していたが、鍾路にはこのときも清渓川を浚渫してできた汚泥が積まれていた[72]。歩道と車道が区分された道も、黄金町、長谷川町、太平通だけであり、ソウル最大の道路である鍾路で関連工事が「上辺だけ」始まったのは1924年のことだった[73]。随時氾濫して周辺の民家に莫大な被害を与えた[74]清渓川の改修工事やその支流の下水工事も、南部だけで進行した[75]。汚物の清掃についても差別は一般的だった。ゴミの場合、15,425人の人口がいた北部第5区では1箇月に4回の回収だったが、9,928人の人口がいた南部第5区では1箇月に6回ずつ回収された。糞尿処理も同様だった。人口が8,773人の南部第5区では糞尿処理を担当する人員は16人だったが、その2倍の人口を抱えた北部第5区では担当者は僅か2人だけだった。道に水を撒く場合も、南部は自動車で、北部では人車で行った[76]。電車の運行時間やバスの配車間隔も、南村と北村には差別が設けられた[77]。

南大門の外には常備消防隊が、永楽町には京城消防隊が、龍山には龍山消防隊がそれぞれ配置されたが、北部には消防出張所が1箇所もなかった[78]。鍾路では常に牛馬車が行き交いながら道に排泄物を落としたが、本町の舗装道路では牛馬車の出入りが全面的に禁止されていた。零細民のための府営住宅も、漢江通、三坂通の日本人用住宅は13坪だったが、蓬莱町、訓練院の朝鮮人用は3坪の「納屋」だった。公園もやはり日本人居住地域内にある奨忠檀公園、孝昌公園などに対しては相当の予算が支出されたが、北村の公園（社稷壇公園、タプコル公園）は全くもって放置された。そのため、タプコル公園は「公園らしくもない公園」であり、「することも行くところもないために昼寝でもしに集まる」[79]人々で溢れる場所、甚だしくは「もしも私がソウルでタプコル公園が私の鼻だったら、私は鼻のない人間になってもいいから、すぐに外科医のところへ行って鼻をすっかり切り落としてしまう[80]」といわれるほど醜雑な場所になった。学校教育においても差別

---

[71] 京城府『京城歳入出予算書』各年版。
[72] 『東亞日報』1922年7月11日「交通の不便な東門路―清渓川修築工事の土を東大門通の低い道に積む（交通不便한 東門路― 청계천 수축공사의 흙을 동대문통 낮은 길에 덮어）」、同 1922年10月24日「市民の不平に鑑みて鍾路通の左右に下水道を（市民의 不平에 鑑하여 鍾路通길 左右에 下水道를 내어）」。
[73] 『東亞日報』1924年3月22日「血税代価で所得を得るとは（血税代價로 所得이 何）」。
[74] 『朝鮮日報』1926年7月18日「昨今来の豪雨で北部浸水六百戸（昨今來의 豪雨로 北部 浸水 六百戶）」。
[75] 『朝鮮日報』1927年2月22日「小下水工事費予算」。
[76] 『東亞日報』1924年3月23日「南北差別の実例（南北差別의 實例）」。
[77] 雙S生「大京城狂舞曲」『別乾坤』4-1、1929年1月、76～79頁。
[78] 『東亞日報』1924年3月24日「朝鮮人と無関係なこびへつらったさまざまな施設（朝鮮人과 無關係한 편벽된 여러가지 시설）」。
[79] 「想像を超えた世界―京城の5つの魔窟（想像 바깥 세상―京城의 다섯 魔窟）」『別乾坤』4-6、1929年10月、154頁。
[80] 洛江居士「京城の夜（京城의 밤）」『新東亜』2-8、1932年8月、91-92頁。

の様相は克明に現れた。南村の日本人学校では、学生1人当たりの学校の敷地が11坪半、教室が2坪半だったが、北村の朝鮮人中学校はそれぞれ6坪、1坪半に過ぎなかった[81]。1926年に朝鮮総督府庁舎が完工した後、北村にも部分的に「土木事業」が始まったが[82]、この場合も開発の利益が朝鮮人に享有されるのを防ぐために、新しく受益者負担制を新設する計画を立てた[83]。

反面、日本人は本町通を通りながら支配民族としての余裕を感じることができ、みすぼらしく雑然とした鍾路の朝鮮人を思う存分蔑視・嘲弄することができた。

本町は美しい通り、繁華な小路、足早に通行する人々、ショーウィンドー、狭い空間、電気看板、花屋、交番、蓄音機のメロディー、ラジオの義太夫、人力車、きれいに着飾った芸妓、犬、50銭のライスカレー、人、人、このように朝鮮の銀座街の行進曲は演奏されている。……本町通は京城で最も繁華な一面であると同時に、京城のシンボルとして都会的繁栄を教えてくれるところだ。本町に活気があるのは即ち大京城全体に活気が満ちるときであり、本町に活気がなくなるのは京城が次第に眠ろうとしているときである84。

「本町は京城市街地の隅にあるが、なぜかそのように活気が充溢し和気が充満する。前後左右の家はすべて2、3階建てでぎっしり並び、鍾路のように低い家はない。暴走する物質文化や色とりどりの人々、その華麗燦爛とした様子は記者の目を驚かせた。反面、鍾路は真ん中に位置していても、総じて朝鮮旧式の家屋で、大きな人が立てば天井に当たってしまうほどであり、その姿も陳腐で凋落している[85]。」

＜図12＞1920年代の普信閣

＜図13＞　1920年代の本町

[81] 「外人の勢力から観た朝鮮人京城」『開闢』48、1924年6月、55頁。
[82] 『東亞日報』1925年12月13日「北部の市区改正は南部の延長主義(北部의 市區改正은 南部의 延長主義)」。
[83] 『朝鮮日報』1927年2月13日「都市計画と受益者負担税(都市計劃과 受益者負擔稅)」。
[84] 南山町人「大京城繁昌記―朝鮮の銀座街 本町通りの巻」『朝鮮公論』17-1、1929年1月、76-77頁。
[85] 『毎日申報』1921年2月24日「市街地巡覧の感想(市街地巡覽의 感想)」。

5. 朝鮮人の京城認識

日本が韓国を強占してから1920年代まで、京城の都市改造は植民地統治権力が主導した。市区改修事業という名の街路体系改造、各種官庁建物および国策会社、銀行社屋などの大規模の近代建築物の築造、朝鮮神宮など宗教的・イデオロギー的建物の築造、何よりも朝鮮王朝時代以来朝鮮人に強烈なイメージ要素として刻印されていた伝統建造物の破壊と新しい建造物を通しての威圧など、すべてが権力の直接作用によるものだった。そのため、植民地化以後、京城の変貌過程を直接目撃した朝鮮人は、日帝植民地権力の意図を容易に認知することができた。

植民地権力の暴圧的な都市改造に対する京城朝鮮人の反応は、まずは無力感と悲しみだった。彼らは景福宮の前に堂々と立ち「総督府の新しい建物の前であらゆる虐待と凄まじいいじめを受ける[86]」立場に転落した獬豸に自身をたとえた。総督府新庁舎建築と同時にその居場所を追われた光化門も「京城の悲しみをひとりで引き受けて、いつも泣いている[87]」存在として、京城の朝鮮人の心中を代弁する存在だった。日本人は雄壮で華麗な総督府新庁舎に対して「全朝鮮民衆」の新庁舎になると賛辞を捧げたが[88]、朝鮮人はその建物の雄壮さにむしろ悲しみを感じ、その華麗さを惨めに寂しく思った。

> 近年、暮れゆく夕陽が涙に濡れた旧宮闕に映り、北岳を越えてくる寂しい風がお前の顔を掠めていくとき、言葉もなく呆然と立っているお前(獬豸のこと―筆者)の姿は本当に寂しかった……お前の格好を見ようと宮殿の中に入ったが、一方の隅に手足を縛られたまま筵を掛けられて無残に横たわっていた。それを見た白い服を着た人の胸も、どうして平安でいられようか[89]。

大部分の殿閣が破壊され、総督府の建物に圧倒されてしまった景福宮を見ながら朝鮮人が感じたこのような感慨は、京城府庁に圧倒された慶運宮を見るときにも、朝鮮ホテルの装飾物に転落した皇穹宇を見るときにも、京城駅舎と朝鮮神宮に左右を抑圧されたまま商業奨励館をはじめとした高層建物に囲まれた南大門を見るときにも、同じように起こったことであろう。よって、この感じ方はまさに京城全体に対する感じ方として拡大し「道路に電車、自動車が走り3～4階の煉瓦の家が建ち、狭い道が広くなっても朝鮮人には全く関係のないこと[90]」であるだけでなく、むしろ朝鮮人はその近代化された都市に「悲しみ」と「寂寞感」ばかりを感じなければならなかった。

> ああ。今日のソウルがどうしたわけで私にこのような悲しみと寂寞を感じさせるのか。田舎の人間として最も華麗で繁華なソウルに来て、こんな寂寞さを感じるとは、いったいどうしてなのか。ああ、分からない。分からない。

---

[86] 『朝鮮日報』1925年9月15日「是非曲直は知らない。宮門の中で隠遁生活(是非曲直은 몰라요 宮門 안에 隱遁生活)」。
[87] 一記者「二日間で隈なくソウル見物する方法(2일 동안에 서울 구경 골고루 하는 법)」『別乾坤』4-6、1929年10月、61頁。
[88] 宮崎生「偉容漢城の空を圧する光化門の新政庁」『朝鮮公論』14-2、1926年2月。
[89] 『東亞日報』1923年10月4日「景福宮」(韓国語)。
[90] 秋湖「ソウル雑感」『ソウル』(「서울雜感」『서울』)3号、1920年2月、43頁。

ああ、私には言えない。言えない[91]。

もちろん朝鮮人はその悲しみと寂寞感の原因を知っている。北村と南村の関係は、植民地化以後10年も経たない短い期間で極端に逆転した。朝鮮人は南村に圧倒された北村の都市景観に、植民地権力を象徴するどっしりとした近代的建物に威圧された旧王朝の象徴物に、自身の立場を見た。帝国主義日本が自慢する「新文明」が「野蛮」な方法で朝鮮の長い文明を陵辱し嘲弄するのを見た。植民地権力の不当な陵辱に対して、朝鮮人は小さな声で極めて用心深く不満を表現せずにはいられなかった。朝鮮人は南大門の前で洗練された姿でぐんと聳え立つ商品陳列館を賛美する代わりに、これが南大門に「糞をぶっかける」ものだと皮肉った[92]。朝鮮人は数百年間ソウル鍾路の象徴物として存続してきた普信閣をゴミの山の中に放置しておく京城府当局者の無神経さと誠意のなさに不満を示した[93]。朝鮮人は博覧会を開いて朝鮮の文物を紹介するからといいながら、「朝鮮の人の欠点をすべて集めてみせる」総督府当局の露骨な嘲弄に憤慨した[94]。

京城の都市空間に反映された植民地権力の意図は明白だった。彼らは京城の都市空間の上に残っている「朝鮮的残滓」に「野蛮性」というレッテルを付けておこうとした。中世朝鮮建築の白眉だった宮闕さえ、みすぼらしく時代遅れの姿で映し出されるしかないようにした。京城や京城の朝鮮人を描写した絵や写真などは、一様に日本人の観点で捕捉されたものである[95]。彼らは朝鮮人の野蛮性を浮き彫りにして、日本の植民地支配が正当なものであると宣布しようとした。しかし、日本が都市空間を変形し、都市空間のイメージを逆転させた方法自体が、暴力的で野蛮なものだった。朝鮮人は植民地権力が「日本人の勢力を助長し、朝鮮人の没落を直接的・間接的にひたすら促す残忍な差別」[96]をしていることを明白に認知しているが、それほど総督府・京城府の差別は「とてもあからさまなやり方」だったのである[97]。さらには植民統治を肯定し、それに積極的に協調した親日派さえ「京城の南山は明るく、北村は暗い」とか「朝鮮はよくなったが、朝鮮人はよくならなかった」[98]と、憤慨する心境を吐露せずにはいられなかった。

植民地権力の差別と嘲弄が露骨であるほど、朝鮮人の怨恨も深まった。「そいつら」には良心の呵責も期待できなかった[99]。鍾路人定（朝鮮時代の通行禁止を知らせる鐘）に怨恨の日々が続

---

[91] 秋湖「ソウル雑感」『ソウル』3号、1920年2月、42頁。
[92] 「特別に彩色したように覆われている青い蔓がはいいが、この横に陳列館か何かなのか、高い煉瓦の家ともっと高い煙突を立てたのは、この門に糞を塗るようなものだ。」（一記者「二日間で隈なくソウル見物する方法」『別乾坤』4-6、1929年10月、59頁。
[93] 「そんな丹青はもう止めて、今、誰かが私の横にある臭いの漂う共同便所とみすぼらしい広告版などなくして、代わりに私の履歴を記録した掲示板でもひとつ立ててくれればよいように思います。」（松雀生「長い間話せなかった　鍾路隣境の身の上話（오래인　병어리　종로　인경의　신세타령）」『別乾坤』4-6、1929年10月、81頁。
[94] 「お前も朝鮮館というところに行ってみたのか？」「そこには行ってない」「いや、本当にそいつらときたらせこい奴らで、朝鮮の人のアラを全部集めているんだ。ああ、恥ずかしい。」（春坡、「ソウル見物に来て忘れてしまうもの（서울구경　왔다가　잊어버리고　가는　것）」『別乾坤』4-6、1929年10月、130頁。
[95] 朝鮮時代の実景絵画は、北から南を眺めるのが一般的だったが、日帝強占期の写真や観光案内図などではその逆に、南山から北側を眺めるものばかりだった（キム・ハンベ、前掲論文（2003年）101頁）。
[96] 『東亞日報』1924年3月23日「南北差別の実例」。
[97] 「外人の勢力から観た朝鮮人京城」『開闢』48、1924年6月、44頁。
[98] 朴榮喆『50年の回顧』1929年、721頁。
[99] 「日本人商街を中心にした奨忠壇公園や漢陽公園を見るとき、そいつらにも良心の呵責は感じられないのだろ

く限り朝鮮人の怨恨も続き[100]、京城という都市を知覚するたびに朝鮮人の胸の中には怨恨の血が沸きあがった[101]。しかし原因と結果は度々混同されるものである。特に旧京城に対する記憶を持たない人は、変化の背景と原因が十分に認知できなかった。ソウルの住民として歴史的紐帯が弱った地方出身住民や若い世代に、そのような顛倒した現状はより頻繁に起こった。事実、北村の住民の構成自体が急速に変化した[102]。日本の韓国強占後、旧来のソウル居住者の中の多数は地方に下ったり外国に流浪したりするか、そうでなければ城外や山の麓に移住しなければならなかった。「ソウル育ち」は一部の新貴族(日本から爵位を受けた貴族)と少数の商売人程度だけが残った。それにともなって、京城の朝鮮人社会の中心が元来の京城人から地方出身の京城人に移ったが[103]、彼らに認知される京城は、「京城育ち」が認知する京城とはまた違うものだった。

「鍾路四街、我々同胞たちの商店地帯から北村一帯のがらんとして暗く重苦しいそれに比べて、あらゆる人の目を眩惑してやまないその光景に、我々の精神まですべてそこに奪われてしまうのだ。……地方からやってきた我々の同胞が一度ここを見物し、この地を踏むとき、どれだけ燦爛としていることか。この驚きと燦爛が、いよいよ羨みと憧憬の的に変化し、彼らの頭の中に深い深い印象を残すようになるのだ[104]。」

京城の住民の一部が、朝鮮人を差別する都市行政と朝鮮文化を侮蔑する空間利用形態に怨恨を抱かずにはいられない状態にあっても、他の一部は挑戦的なものとまさに対比される、洗練されて華麗な帝国主義日本の文化を憧憬し、その文化を享有することを熱望していた。

6. おわりに

中世都市ソウルが近代都市に変貌し始めたのは1896年ごろからだったが、これが本格化したのは1900年代末に日本人がソウルの空間の支配権を掌握してからのことだった。それにともなって京城の近代化過程には植民地という現実がそのまま反映されることになった。日本人支配者は、あるときは不注意に、あるときは誠意なく、またあるときは露骨な悪意をもって京城の都市空間を変化させていった。彼らは京城において朝鮮王朝と大韓帝国の権威を消してしまおうとした。王朝権力を象徴していたあらゆる建造物がその残影だけを残したまま侮辱の対象になり、日本人居留地を中心にした南村には特権的地位が付与された。都市行政と都市計画活動のすべてが、激しい民族差別の基調の上になされた。そのあらゆる行為は京城の都市空間に著しい痕跡を残し、

うか」(「京城雑話」『開闢』69、1926年5月、79頁)。

[100] 「鍾路隣境、それにとってはひたすら怨恨の日々が続くだけだ。一年に一度ずつそれに秋の風が吹き抜ける度に、北村に向かう人の群れに鍾路を死守しろと言い聞かせるのだ。」(崔永秀「漢陽秋聲」『新東亞』2-10、1932年10月、36頁)。

[101] 「滅亡していくこの京城、この都市、我々はこれを知覚する度に胸を痛め怨恨の血を沸き立たせる!」(『東亞日報』1923年3月7日)。

[102] 小春「ソウル中心勢力の流動の昔と今」『開闢』48、1924年6月、57頁。

[103] 鮮于全「余の京城感と希望―京城人と地方人(余의 京城感과 希望―京城人과 地方人)」『開闢』48、1924年6月、62頁。

[104] 鄭秀日「ジンゴゲ(진고개)」『別乾坤』4-6、1929年10月、47頁。

京城住民の意識に強烈なイメージを残した。リンチが指摘したように、都市イメージを規定するすべての要因が、あるときは即座に、あるときは朝鮮人の文化や歴史的共同経験に関連した複雑な連想作用を経て、朝鮮人の自意識と日本人支配者に対する態度に影響を与えた。

朝鮮人は景福宮、昌慶宮、徳寿宮など滅んだ王朝の象徴を見ながら、残酷、悲しみ、悲哀を感じ、その横に建った日本の新しい建築物を見ては、その雄壮さに感嘆しながらもその無神経さと抑圧的な空間活用に不満と憤怒を表出した。植民地権力は朝鮮人と朝鮮人の街、朝鮮人の居住地と朝鮮人の文化すべてを露骨に差別し、嘲弄・蔑視した。植民地権力の差別と蔑視が露骨であればあるほど、朝鮮人は総じて自らの空間、自らの生き方がみすぼらしく貧しいものになった原因を明瞭に認識した。植民地権力は京城に自らの権威と文明性を刻印しようとしたが、その結果は朝鮮人に憤怒と怨恨を植え付けただけだった。

明らかに、朝鮮人・北村・鍾路と、日本人・南村・本町の間には「不潔－清潔」「みすぼらしさ－雄壮さ」「没落－繁栄」「陰湿－活気」「野蛮－文明」の大きな隔たりがあった。京城の都市空間はその差異を可視化し、それを京城の住民たち－朝鮮人と日本人とを問わず－に反復的、持続的に想起させた。北村の汚く危険な路地を歩きながら、朝鮮人が日本人支配者に怨恨を抱いたのは当然のことだった。差別に対する憤怒は朝鮮人内部の階層的差異を越えるものだった。

しかし、いったん作られた構造とコントラストは直感的なイメージ要素として接近するものである。京城が植民地都市として再構成される過程で京城の朝鮮人が抱いていた憤怒と怨恨は、やがて別の感情に転移し始めた。北村の住民構成が大きく変わったことも、この転移過程を加速させた。大韓帝国期まで京城の住民は主に国家権力に頼って生計を維持していた。京城の住民の絶対多数は官僚と軍兵、市廛商人、貢人で構成されていた。国家権力の所在が変わるにつれて、国家が与える恩恵の対象も変わった。植民地権力が付与する特権は日本人に集中し、日本人は自分たちだけのネットワークを形成し、その中で権力を享受した。朝鮮人がその枠に入り込む余地はほとんどなかった。京城の変化を目撃しながら憤怒を感じた人々が1人2人と京城を離れる間に、地方の富者や留学生、新しい文物に進んで適応する準備ができていた人々が京城の新しい住民になった。

京城の空間が変っただけでなく、その空間を認知する人々もまた変った。植民地権力の意図により効率的に反応する人が増えていったのである。京城の新しい住民は、日本の街や日本人家屋、日本人から「文明」と「現代」を読み取った。彼らは「文明」を排斥し、そうすることで「文明」から阻害される道を選びはしなかった[105]。彼らは過去のソウルに恋々とはせず、日本人が朝鮮人に対して作り出した知識を習得し、その知識を基盤に自身を評価し始めた。彼らは「文明」という新しい宗教を受け入れ、それに適応するために自ら努力した。植民権力に対する怨恨が1920年代の民族主義運動を下支えする感受性であったとするならば、帝国主義文化に対する憧憬は同じ時期、同じ場所で民族改良主義を扶養した大衆的感受性だった[106]。1920年代の京城の都市空間は、

[105] 1920～1930年代に本格的に出現した「流行」も、やはり「文明」から阻害されまいとする大衆心理を基盤としたものだった。（キム・ジンソン、前掲書、76頁）。
[106] 京城の都市空間が「安定化」する1930年代に入ると、文学作品などには民族性が抜け落ちた都市的感受性が

そのように朝鮮人に抵抗と順応・同化の二律背反的な対応態度を教える「空間―機械」として機能したのである。

主に認知される。1930年代の言論統治の強化がそのような変化を強制したという側面はあるが、それは同時に資本主義的消費文化が作り出す大衆的感受性でもあった。(カン・シモ「日帝植民地治下京城流民の都市的感受性形成過程研究―1930年代韓国小説に現れた都市的消費文化の成立を中心に―」『ソウル学研究』(강심호「일제 식민지 치하 경성부민의 도시적 감수성 형성과정 연구―1930년대 한국소설에 나타난 도시적 소비문화의 성립을 중심으로 -」『서울학연구』)21、246頁を参照。

批評文（森山茂徳）

本研究は、植民地期における京城(ソウル)における都市化の様相、および、それに対する当時の韓国人が抱いた印象ないしはイメージを分析したものである。

まず巻頭言では、朝鮮時代のソウルには豊富なイメージがあったが、それが植民地統治によって極端に逆転されたという主張が導かれる。そして、1930年代の都市に関する最近の研究動向(近現代性への注目)への批判と、民族性への注目という本研究の視角が提示され、資料上の制約から1920年代を対象とし、1920年代が都市の政治的・イデオロギー的対立点を最も良く示すという展望を指摘する。以下、全体は4つの部分に分けられる。各章で強調される諸点については次の通りである。

第一に、1882年以降のソウルにおける日本人居住地形成過程が分析され、様々な特権・便宜によってそれが南村中心に拡大し、また北村が朝鮮人居住地だったため、民族別居住地分離現象が生まれ、それが植民地権力の差別的行政と相俟って、支配者・被支配者、富者・貧者として表象された。

第二に、南村に新しい建造物が集中し、他方、朝鮮時代の建造物等が撤去・移転・縮小などの措置によって「みすぼらしい状態」にされ、そのことは、旧朝鮮と新朝鮮の対比のみならず、「『朝鮮的なすべてのもの』を蔑視・否定しろというメッセージを伝達するテクストとなった」。

第三に、都市機能整備が日本人居住地に限定されたため、韓国人居住地は「埃が舞い臭いが漂う醜い状態のままで放置」されたが、日本人は「支配民族としての余裕を感じ」、後者を蔑視・嘲弄できた。

第四に朝鮮人は都市の変化に「悲しみ」、「惨めさ」、「寂寞感」などを感じ、また不満、憤慨、怨恨などを示し、ソウルから移住し、やがてソウルの韓国人社会の中心は地方出身の京城人に移っていった。

最後に、全体の要約とその後への簡単な展望の後、「1920年代の京城の都市空間は、そのように朝鮮人に抵抗と順応・同化の二律背反的な態度を教える『空間－機械』として機能した」と結論される。

以上のように、本研究は植民地期における社会のあり方のうち、とくに都市ソウルが韓国人に与えたイメージに注目し、それを些か文学的に叙述したものであり、当時の韓国人の感情の再構成という点で評価できる。しかし、問題点もないわけではない。それらは以下の通りである。

第一に、都市ソウルの変化過程について、韓国人が抱いた否定的な都市イメージを強調することに主眼があるため、様々な問題点がみられる。まず、多様な都市機能が必ずしも体系的・総合的に論じられていないため、叙述される都市機能が恣意的に選択されたと誤解されかねない。また、南村に都市機能整備が集中した理由を植民地権力の意図に帰しているが、植民地権力としてそれは当然のことであり、しかも、立地条件の良くない南村に住むことになったのはそもそも朝鮮政府の指示だったのであり、そこを改修するのは当然である。そうしないとすれば、立地条件の良い土地を韓国人から奪う方法をとることになったであろうが、その方が韓国人にとってプラスのイ

メージを与えることになったというのであろうか。つまり、都市化過程における多様な可能性を言及せず、実際に起った変化だけを記述しているとされる恐れがある。

さらに言えば、立地条件が良いこと、ないしは近代的な都市機能が整備されていることの方が良いという、価値観が内包されている印象を強く受けた。しかし、近代的なものがすべて良いわけではない。それとは逆に、民族に伝統的な価値の追求という立場もありうるであろう。例えば、日本では、谷崎潤一郎が『陰影礼賛』を書いている。総じて、価値観が限定的と思われる。

第二に、文学的な印象記述という方法のため、どれだけの韓国人が実際にどのような都市イメージを抱いたのかにつき、説得的な資料が乏しい感は否めない。「悲しみ」、「惨めさ」など形容詞は使われるが、それを記述した資料の引用が恣意的と受取られかねない。また、結論部分で新しい住民の対応が副次的・補助的に述べられるが、その意味は明瞭ではない。もし、対応が従来の都市イメージを覆すものであるなら、それは何故なのか、覆さないとするなら、それは何故なのか、つまり1930年代との関係が論理的に理解できないのである。それゆえ、1920年代を対象として選んだことが、本研究の主張する都市イメージに適合的だったからにすぎないとされる恐れがある。それでは研究の射程は狭いし、植民地期の社会を総体として記述したことにはならないのではないか。つまり、都市研究上の位置づけを明確にすべきである。

第三に、最大の問題点は、視角・方法・事実記述など、限定的で広がりがない印象を受け、示唆される点に乏しい感があることである。第一で述べたように、多様で複雑で豊かな歴史的現実のごく一部しか事実として触れられていないし、第二で述べたように、論理的な関連性への考察も不十分にみえる。さらに、他国の植民地下の都市との比較、都市と農村の関係など都市の位置づけ、ソウルと他の都市との違いなど、様々な視角はほとんど言及されていない。そして、繰り返せば、近代的な都市機能を良いとする価値観が内包されている感がある。都市イメージが研究の対象だとしても、以上の諸点への考慮が不足・欠如している場合、とくに日本人に研究として説得力がある印象をもたせることにはならず、欠点のみが指摘されるという危険性がある。とくに歴史研究の場合には、因果関係の分析が弱いと足をすくわれかねない。注意すべきであろう。

執筆者コメント

森山氏のいくつかの批評に対して簡単に答えることにする。

第一に、論文で記された都市機能が恣意的に選択されたものだという指摘に対して。

この論文は都市機能の全体を扱うことに目的をおいたのではなく、都市居住者または都市訪問者に強い印象を与える都市景観、すなわちイメージの要素を扱ったものである。経験的、理論的にイメージの要素を抽出することのできるものとして、リンチの5つの要素を選択し、その各々がどのように当時の権力―1920年代までは主に植民地支配権力―によって構築され、植民地都市住民がそれをどのように認知したのかを検討したものだ。従って都市機能の選択が恣意的であるという指摘には同意できない。

第二に、植民地権力の都市開発・整備・管理が南村に集中したのは本来南村が「落伍した」地域であったためであるという指摘に対して。

評者が指摘したとおり日本人たちが「南村」を整備する代わりに「北村」を奪う道を選んだかもしれないが、そのように見るのは場所と人間の関係が持つ相対的安定性（または固定性）を無視するものだ。1910年以前にすでに在京日本人社会は30年近い歴史を持っていた。また、植民地権力が京城で遂行した都市開発・整備・管理は決して不均衡を是正する水準に留まらなかった。それは、あらゆる面で相対的優位にあった北村を「劣等な地域」として急転直下させるほど急激で全面的なものであった。

第三に、植民地権力が作りだした都市景観を評価することにおいて「近代的なものはすべて優れているもの」という限定的な価値観に立脚しているという指摘に対して。

この論文で強調したのは植民地支配権力の「差別的で悪意的な」空間改造であり、空間の近代性の問題は副次的な関心対象にすぎない。「近代的なものがすべて優れている」という思考は植民地支配権力が流布させようとした「限定的価値観」であり、その点で植民地権力の空間改造が「近代性の拡散」問題と密接に連関していることは明らかだ。この点のために評者の批評が対象を混同しているのではないかと考えている。

第四に、当時「どれだけの韓国人」が、「実際にどのような都市イメージ」を持っていたのかを示すための説得力ある資料が不足し、そのために筆者の論旨を正当化するために「1920年代」だけを分析対象に選択したものと見られるという指摘に対して。

植民地の状況で日本人たちは言いたい言葉を我慢せずに言うことができたが、韓国人たちには「言ってはならないこと」が実に多かった。そのような「言論状況」を考慮せずに、「数量的に」「どれだけの韓国人」がどのような印象を吐露したのかを述べろというなら、不満を吐露する韓国人はごく少数に過ぎなかったと考えざるを得ない。この点で筆者は評者と深刻な認識上の違いを感じる。序文で明らかにしたように筆者が1920年代を対象にしたのは論旨を正当化するためではなく、この期間がそれでも韓国人たちが発言できる内容が「相対的に」豊富であった期間であったためである。ただ個人の日記や感想文の類の一次資料に対する接近が不足した点は筆者も認めるものであり、それに対してはありがたい忠告として受け入れる。

第五に、視角・方法・事実に対する記述が限定的であるという印象を受け、因果関係の設定が不十分であり都市史全般に対する考察が不足しているため「日本人に説得力のある研究」になりえないという指摘に対して。

都市機能の変化とそれに伴う都市・農村関係の変化、京城と他の都市の比較などは初めから本研究の中心対象ではなかった。これらの問題は論文一編で扱うにはとても範囲が広い。「日本人に説得力がない」という指摘は大体において首肯できるが、ひとつだけ言及する必要があるようだ。1995年韓国政府は「歴史的」建造物である「旧朝鮮総督府庁舎」を撤去して景福宮を復元することに決定した。近代の合理的観点からは実在する「文化財」的な建造物を壊し、すでになくなった建物を「模型状態で」復元するということを理解することはできないだろう。当時の大多数の韓国人たちはその建物の建築美や構造だけを見たのではなく、その建物が表現している「印象」と「イメージ」を見たのだ。日本の植民地支配によって思想的・文化的・情緒的に「不具状態」に置かれるようになった韓国人たちの「意識状態」を日本人たちに理解させるために韓国人の努力も必要であるが、日本人自らもこの問題に対して反省的で省察的な姿勢で接近する必要があると考える。